SAPPORO 教区 NEWS
第16号
2010年11月15日
発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10
Tel. 011-241-2785 ／ホームページ：http://www.csd.or.jp

# 第三十六回カトリック正義と平和全国集会「札幌大会」開催

九月十八日（土）から二十日（月・祝）までの三日間、聖公会札幌キリスト教会、カトリック北十一条教会、天使大学を会場に行う。分科会・現地学習会には道内外から約三〇〇人、三日目の社会司教委員会主催の「人権シンポジウム」には約六〇〇人が参加。

初日は、聖公会札幌キリスト教会にて、開会式が行われ、引き続き基調講演とワークショップが行われた。基調講演では、北海道アイヌ協会副理事長の阿部ユポさんが、『アイヌ民族抵抗運動』の歴史について、我々にも分かり易く述べられ、ワークショップでは、北海道アイヌ協会人権部長でありエテケカンパの会会長の小川早苗さんが「アイヌ民族衣装」について説明し、『アイヌ神謡集』からカムイユーカラを朗読し、アイヌトンコリ&唄from北海道の小川もといさんが『民族楽器トンコリ・ムックリ』を演奏し、アイヌ民族をより理解し、アイヌ民族としての人権を認め、日本の先住民族と認め支える法律制定の必要性と協力を訴えた。

二日目は、天使大学を主会場に、それぞれ五つずつの分科会、現地学習会、ネットワーク・ミーティングが行われた。

## 三日目のシンポジウム会場は大会参加者と一般参加者で満席

最終日は、カトリック北十一条教会で、社会司教委員会主催の『すべての人の人権を大切に』をテーマに、シンポジストに菊地、幸田、松浦の三司教を迎えシンポジウムと派遣ミサを行う

一番目に、松浦悟郎司教（大阪補佐司教、難民移住移動者委員会委員長）が、「人間の尊厳と平和」と題し提言。

松浦司教は、一九四八年に国連で採択された「世界人権宣言」と、宣言採択六十年目に日本の司教団が発した「すべての人の人権を大切に」という司教団メッセージを取上げ、人々と共有しない宣言には意味がなく、国際社会と共有した人権宣言のメッセージには意義があると述べた。カトリック教会も聖書に基づく人間観があるが、集団の論理、国家の論理などに揺れ動きながらも、福音に近づく歩みを二千年余り行ってきた。

教会の中でも人権が深まってきた歴史があり、男女平等という問題や、人と人の関係も、聖書の原点を見つめながらの旅の途中であり、現在も段階の一通過点であることは否めないこと。そして、人権の基本は、男と女や、人としての尊厳を傷つけないことであり、外的な傷よりも、人と人の関係性の中に我々の尊厳の問題があると語った。

最後に、日本国憲法前文の平和的共存権にふれ、人が傷つくこと、貧しいことを見ないふりしてはいけないと結んだ。

二番目に、菊地功司教（札幌教区管理者、新潟司教、カリタスジャパン責任司教）が、「民族差別といのち」と題して提言。

菊地司教は、「ルワンダ問題」を取上げ、ルワンダで起こった紛争が何故起こったのかを、欧州列強の植民地支配や、ルワンダの民族間（ツチ族＝少数派とフツ族＝多数派）の問題を、歴史的経過からわかりやすく説明した。

そして、ルワンダでの難民や虐殺の民族紛争の始まりは、国内の部族間の争いではなく、海外からの政治的な争いに民間人が巻き込まれていったものであるこ

と。そして、政治的・経済的な目論見で、他でも世界中で紛争が起こっていること。怖い話だが、ルワンダのような紛争は、どこでも簡単に起こりうる話であると語った。

カトリック国と言ってよいルワンダで起こったこれらの出来事は、政治的・経済的な目論見でおこる紛争に、我々がどのように関わっていくことができるのか、また、どのように対処していくべきなのか、我々は、改めて問われているような気がする。

三番目に幸田和生司教（東京補佐司教、カリタスジャパン担当司教）が、「人権ー聖書と現実を見つめて」と題して提言。

幸田司教は、「世界人権宣言とカトリック教会」を取上げ、聖書の中にある人権の尊重について、聖書の箇所を引用し、教会の歴史は必ずしも人権を尊重していたとは言えない部分もあったこと（奴隷を認めていた事など）は事実である。しかし、弱い人の叫びを聞き、傍に来て助けてくれるのが我々の神であり、目の前の苦しみに共感するのがイエスであると語り、我々もイエスの行った証を行うことが大切であると語った。

最後に、人間らしい生き方を脅かされている人々について、世界的な問題として、HDI（人間開発指数＝経済的な豊かさに、健康的な豊かさと教育的豊かさを加えた指数）を取上げ、世界では選択肢を奪われている人々が多くいること。そして、身近な国内の問題として、児童虐待やDVの問題や、自死にまで追い込まれる人々の問題などに触れ、人権問題として我々はキチンと取り組んでいかなければならないと結んだ。

シンポジウムの後に行われた派遣ミサの説教で、松浦司教は、準備してくれた方々に謝意を述べ、札幌大会の特色としてアイヌ民族の戦いの歴史を上げて、TVで取上げられていた心臓病を押してアイヌ文化の歴史を纏め上げた方を思い起こした話をされ、アイヌ民族を支える法律を定める必要性を訴えた。

聖書の言葉「あなた方は幸いだ。」と語りかけたイエスの言葉を信じる我々キリスト者の証にかかっているのだろう。

# 第11回（2010年度）インターナショナルデー開催

## ―キリストの民として兄弟姉妹であることを再確認―

10ヶ国余りの国から210人以上が参加し、教区管理者の菊地功司教の司式で、札幌カテドラルにてインターナショナルミサを行う

菊地司教はミサの説教の中で、ガーナに宣教に行くきっかけとなった出来事やその後に司教となり今回ガーナを司祭叙階のために訪れたことにふれ、計り知れない神様の計画がある事について語られた。菊地司教が、一九八三年に英語を勉強しに米国のシカゴに行った時、隣室の住人がガーナ人の神父であり、その隣人の神父の勧めで後々ガーナに行くことになったこと。そして、その隣人の神父は現在ガーナで司教になり、そして、自分も現在司教になっているお陰で、ガーナで宣教していた頃の侍者を手伝っていた少年が司祭叙階を受けることになった今年、七月下旬から八月にかけてガーナを訪れて司祭叙階に立ち会うことができたこと。そして今回叙階を受けたガーナ人の神父が今度は日本に宣教に来ることになったことを語られ、これらの出来事は、神様の聖心で、神様の大きな計画の一部であり、私たちが自分でやろうとしても出来ないことである。

したがって、私たちは常に、神様の求める聖心に従い、み旨をよく理解し実践していかなければならない。全世界は様々な国々の人々で成り立っていて、日本にもいろんな国の人々が居住するようになった。宣教師以外の人々でも、来日している人々はカトリック信者として派遣されてきている。それぞれが出来ることをなしていくことがとても大切である。キリストの証を実践し、キリストの民として兄弟姉妹であることを、このミサをともに与ったことを契機に、改めてそのことを認識し、互いにキリストのみ旨を行っていこうと結ばれた。

## 各国の自慢料理がならび交流イベント開催

ミサ後には、各国の自慢の食べ物が並ぶ中、午前中の雨もすっかり上がった青空の下で、感謝と交流のイベントが行われた。実行委員会の発表で延べ約九〇〇人が参加し交流を深めた。

初代教会が他民族の集まりであったように、多くの国々の人たちが日本に住むようになった昨今、キリスト者として、それぞれの文化を理解し合い、民族性を認め合うことが大切なことである。年に一回ではあるが、このような交流の場を持つことは、キリストのみ旨を証していく手段として有意義なことであろう。

## 岩見沢教会献堂百周年を祝う

十月十一日（月・体育の日）午前十時から献堂百周年を祝う記念ミサが、教区管理者のタルチシオ菊地功司教の司式で行われた。菊地司教は説教の中で、これまでの司祭、修道者、信徒の皆さんの苦労を労うとともに感謝した。そして、地域、教区、日本、世界の共同体の一つとして、初代教会の美しい姿である一致した教会共同体の姿を世に示すことが、イエスを証し、宣教を示すことになると語った。建物だけでなく共同体がしっかりした存在になることが大切なことであり、福音の問いかけに耳を傾け、イエスはこうであると自分の言葉で応えられる宣教共同体となれるように、新たな百年に向かって歩んでいきましょうと結ばれた。

ミサ後には、教会向かいの空知農業会館で祝賀会が盛大の中にも和やかに行われた。

**【岩見沢教会の略歴】**

一九〇九年
初代主任司祭のイッポリート・ビルトー神父が市内に住居を借りて布教活動を行う。

一九一〇年春
現在地に敷地千坪を購入して、聖堂と司祭館を含む二階建ての教会を建築する。

一九二八年
聖堂が手狭となり、一回目の改築工事を行う。

一九二七年
札幌教区で最初の託児所「天使園」を開設。一九四二年に幼稚園として正式に認可を受ける。

一九五五年
老朽化に伴い改築工事を開始し、一九五六年十月二十八日に富沢司教の司式で改築完成記念ミサを行う。

一九九九年
天使幼稚園の新園舎新築。

二〇〇二年
老朽化に伴い工事を行っていた新聖堂が完成し、十二月八日に大雪にも関わらず大勢の方たちが出席して竣工を祝う記念ミサが地主司教の司式で行われた。

## 来日九十周年を祝う 殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

### 神様の聖心と、皆様の支援に感謝

八月十七日に札幌マリア院聖堂において、各修道院代表者と札幌修道院のシスター約七十名が参加して、ペトロ地主敏夫司教の司式で、来日九十周年を祝うミサと集いが内々で行われましたが、その一コマを皆さんに紹介したいと思います。

修道会の日本での活動の始まりは、九十年前（大正九年）の八月十八日に、ドイツから横浜経由で三名（Sr.クサヴェラ、Sr.ヨハンナ、Sr.カンディダ）のシスターが来道し、札幌マリア院を開設したことでした。五年後に札幌藤高等女学校を開校したのが始まりで、その後、道内各地にマリア院、大学（短大含む）、高校、中学、幼稚園、福祉施設を次々と開設していき、教育事業と福祉事業を通じて、多くの人々に神様の聖心を伝えていきました。

地主司教はミサの説教で、一九一四年に最初の来日が第一次世界大戦で中止になったことや、九十年前の八月十四日に横浜に上陸して、札幌に向かう前に一日早めのマリア様の祝日を祝ったのをきっかけに開設する修道院の名前がマリア院となったこと、司教が幼児期だった頃の当時のシスター方との思い出などにもふれ、来日当時の北海道の状態を鑑み、先人のシスター方がどれ程大変な思いと決心をして来日し、そして北海道で宣教していったかを考えると、その労をねぎらうと同時に、シスター方の高潔な志に尊敬と感謝の気持ちを述べた。

### 当日、進行を担当していた永田淑子シスターは、

「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会（通称「マリア院」）の最初のドイツ人シスター三人が札幌に到着したのは、一九二〇年八月十八日のことでした。以来、幾多の困難や試練を乗り越えて、九十周年を迎えることができました。この度、札幌マリア院において、ささやかな来日九十周年の感謝の集いが行われました。

来日当初はもちろん、それ以降もフランシスコ会（フルダ管区）およびマリアの宣教者フランシスコ修道会の皆様には、多大なお世話をいただいてまいりました。第一次世界大戦敗戦国であるドイツから来たシスターたちは、マルクの暴落で経済的な支えを失い、本部からは帰国の促しもあったほどでした。しかし、学校を作って日本の子供たちに神の愛を伝えるという使命感に燃えたシスターたちは、キノルド司教様とも相談の上、日本に留まって

初志を貫徹することを選びました。

キノルド司教様には、日々の生活上のご配慮をいただいたばかりでなく、学校を建設するための資金的援助（そのために神父様を一人、アメリカに派遣して寄付集めをしてくださった）、そして大切な霊的世話などを、まことに父の心でして頂いたのでした。

その後、戦中・戦後の困難を乗り越えることができたのも、絶えず暖かく見守り励まし助けてくださった司教様や神父様方のおかげであったと感じます。

この度の九十周年の感謝の集いでは、そのような思いをこめて、地主敏夫司教様主司式による感謝ミサを行い、そして、続いて聖堂で「日本における九十年の歩み」というスライドを見ました。九十年間を三十五分間の超特急で走りましたが、どれほど大きなお恵みをこの九十年間にいただいたか、という恵みの再確認のひと時になりました。年輩のシスターたちにとっては消えかけた思い出の再発見となり、若いシスターたちにとっては先輩たちの歴史を知る興味深い体験となったことでしょう。

その後、司教様や神父様（加藤神父様とマリア院滞在中のイエズス会ブランガン神父様）とご一緒にささやかな会食を行いました。その席上、シスター・クサヴェラが語った来日当初の話の記録が読まれたり、彼女の晩年の肉声を聞いたりして、楽しいひと時を過ごしました。

全く内輪の感謝の集いでしたが、感謝の気持ちは決して内輪に留まるものではございません。もう殆ど天国に先立たれた司教様や神父様方、天使のシスターたち、多くの信者の皆様、そして学校のご父母や卒業生たち、その他様々な形で（あるいは無形の）お世話になった皆様に、心からお礼を申し上げます。私どもは現役を退いたシスターが多くなって参りましたが、さらに次の百周年を目指して、神様のはからいのうちに信頼して歩み続けて参りたいと思います。

御心ならば神様が多くの入会志願者を送ってくださるよう、どうぞお祈りください。感謝の祈りのうちに。」と、現在の心境を語られた。

## 日本ダルク創設二十五周年を祝う

**映像や講話、シンポジウムなど多彩な企画内容で、四半世紀の歴史を振り返り、新たな歩みに向けて決意を固める。**

八月十八日（水）に、東京都・台東区の浅草公会堂において「ダルクフォーラム二〇一〇　二十五周年記念　ダルクの流儀－回復の権利－」（主催・日本ダルク、共催・東京ダルク）を開催。

今や全国に五十施設超までに増えたダルクの関係者や支援者が、北は北海道から南は沖縄まで、全国から千人以上が一堂に会した。

オープニングでは懐かしい東京ダルク草創期の写真やダルク第一世代の施設長らを中心とした二十五周年に対するコメントが、舞台正面の大きなスクリーンへ上映された。

次いで、龍谷大学の土山希美枝氏（政治学）が「他機関連携を〝つなぎ・ひきだす〟」をテーマに講演。地域社会の行き詰まりを打破する新たな連携の在り方を示唆する内容であった。

### ●しなやかで強い意志と覚悟を

午後のプログラムは衆院議員の田中康夫氏の祝辞から始まった。近藤さんを人格的にもリーダーとしても高く評価する田中氏ですが、短いあいさつの中にダルクの本質が凝縮して解説され、心に響くいくつかの重要なキーワードがあった。田中氏はダルクの良さを「いい意味でのいい加減さ」「ゆるやかな横のつながり」「自由度の高さ」などに求めた。現代社会を動かす（迷走させている）パワーゲームの論理と原理に、自分たちを棚に上げない当事者主義による選択（＝チャンス）の可能性を、抑制的なビジョンとして対置してきた地道なダルクの歩みをしっかり押さえていたように感じる。田中氏はシニカルに「清く正しい人たちは正義感に燃えて、こぶしを突き上げて〝権利の回復〟を声高に主張する。これに対して、ダルクが〝回復の権利〟を掲げたことこそがダルクの流儀。しなやかで強い意志と覚悟を持ち、次の二十五年に歩を進めて」とエールを送った。

その後、「多様化していくダルク」をテーマにしたシンポジウムを行う。ファシリテーターを宮本真巳氏（東京医科歯科大学大学院教授）が務め、シンポジストとして主にダルク第二世代である上岡陽江氏（ダルク女性ハウス＝フリッカ代表）、市川岳仁氏（三重ダルク代表）、中山氏（アパリクリニック上野職員）、中川賀雅（長崎ダルク代表）らが意見を述べ合った。

終わりに近づき、全国のダルク（関連施設も）を、設立年順に紹介した映像を舞台正面の大スクリーンに映し出した際には、会場を埋めた各ダルクの参加者も立ち上がって自分たちの存在をアピール。

最後は「ダルク二十五年の歩み」をテーマにダルク創始者の近藤恒夫氏が締め

## 海星学院高等学校創立50周年を祝う

**十月一日（金）午前十時三十分から、学院ベネディクトホールにて記念式典を行う**

海星学院高等学校は、室蘭市の学校誘致の要請により、一九六一（昭和三十六）年に室蘭カトリック女子高等学校として開校。その後、一九九一（平成三）年に校名を聖ベネディクト女子高等学校に改め、さらに、二〇〇三（平成十五）年には、男女共学制として、校名を海星学院高等学校として、新たな一歩を踏み出している。これからも、キリスト教の精神に基づいた教育を通じて青少年の教育に力を注いでいく。

括った。文字通りダルク二十五年の歩みは、そのまま近藤氏の回復の歩みでもあるのだ。

夜は、会場を近くの浅草ビューホテルに移し、ダルクらしい手作りの懇親会を開催。ダルクを創設した近藤恒夫が羽織袴姿で登場し、会場は和やかなムードになった。これまでダルクを支えてくれた全国の主な関係者を顕彰し、感謝の気持ちがこもった特別な記念品を近藤氏自らが贈呈した。懇親会参加者は二〇〇人を超えた。

## ベルサイユ教区のエリク・オモニエ（Eric AUMONIER）司教が来札

エムリク神父の生まれ故郷であるフランス・ベルサイユ教区のエリク・オモニエ司教が、九月二十日から花川マリア院で行われていたパリ外国宣教会司祭の黙想会に講師として来札した。

エリク・オモニエ司教は、エムリク神父を伴い、九月二十四日（金）に菊地司教と地主司教を表敬訪問のため司教館を訪れた。

同司教は二十六条教会で信徒との交流会を行ったり、洞爺湖を訪れたり、精力的に活動。

また、日曜日の国際デーのイベントにも訪れ、参加者に話しかけられていた。

―菊地司教とともに―

―国際デーの参加者と―

## …青少年の活動報告…

### 第十九回カトリック青年連絡協議会（NWM）全国大会が支笏湖で開催

十月九日（土）と十日（日）の両日、支笏湖ユースホステルを会場に行った。

札幌教区が主催となった今年のテーマは「タアタアンワ」で、アイヌ語で「ここにいる」という意味だそうである。

イエスが聖書の中で「わたしはここにいる。」と語られている言葉を、北海道の支笏湖という大自然豊かな場所で、全国から集まった青年たちは、いつも傍に神様と仲間たちがいることを実感したことだろう。

### カトリック高校生会『夏キャンプ』

八月三日～五日、二十名が参加し洞爺湖で行われた

執行部の武川息吹君から次のような感想を貰った。今年度の夏キャンプは、「神様が分かるでしょ」のテーマをもとに行われました。このテーマの意味は、「普段とは違う環境で自然や人と触れ合うことで、神様の存在を様々なかたちで感じてほしい。」でした。今年は洞爺湖でのキャンプだったので、テーマにあったとても良い環境でキャンプをすることができました。

神父様やリーダーの力を借りることで、なかなか経験できないことをすることができ、また自然のなかでミサに授かることで、より神様の神秘や存在を感じられたと思います。

参加者十名、執行部六名、リーダー四名の二十名が夏キャンプに関わりましたが、それぞれが協力することにより、スムーズにキャンプを進められました。大雨が降ることも無かったのでスケジュールの大幅な変更もありませんでした。

執行部としての反省点はたくさんありますが、キャンプは無事成功したので良かったと思います。

キャンプを通じて、教会、カト高、夏キャンプというものが素晴らしいものだと、改めて実感することができました。

これからは、夏キャンプでの反省や経験をいかして、練成会に向けての準備や話し合いを進めていきたいと思います。今回、キャンプを成功させてくださった、参加者やリーダー、そして神様に感謝します。ありがとうございました。

### 室蘭ブロック 夏期学校

（室蘭・東室蘭・伊達・登別）

洞爺湖畔で行われ、参加した子どもたちは、信徒十名を含む四十八名。リーダーを含めると七十名以上が参加。

未信者の子どもたちも多く参加し、「みんな神様の子ども」をモットーに心に蒔かれた種が静かに育つことを祈りながら行われた。

今年の新しい試みとして、聖書物語のビデオ鑑賞を実施。長時間にも係わらず多くの子どもたちが熱心にビデオを観ていたことに感動を覚えたとリーダーは語っていた。

湖でのいかだ遊び、烏帽子岳への登山、夜の肝試し、野外ミサと盛り沢山の行事を楽しく過ごしたようです。有意義な時間を事故もなく過ごせたことを神に感謝し、来年はさらに多くの参加者を願っている。

# 札幌地区平和旬間　平和を祈る四十日間

## 「平和のために働く人は幸い」をテーマに7月7日から8月15日まで、平和のために祈りました。

七月二十四日（土）北一条教会で午後三時から「最も小さき者のひとりに」をテーマに、教区管理者の菊地功司教が、主任司祭として派遣されていた『ガーナのオソンソン村での司牧の様子』や、カリタスジャパンの活動として訪れた『ルワンダの難民キャンプでの出来事や実態』について語られた。

これらの経験を通して、キリスト教国でありながら、教会の中で虐殺が行われた実態をふまえ、キリスト教を信じる私たちが、どのような社会を築くべきか、そして、一人ひとりがどのように生きるべきかを語られ、「一人ひとりを大切に、一人ひとりが神様の聖心に従って相応しく生きられるように」ともに祈ろうと結ばれた。

八月十五日（日）午後六時から北一条教会にて、担当司祭の新海雅典神父司式で行い、平和の祈り鶴を奉納。折り鶴は、広島平和公園と長崎原爆慰霊碑、沖縄平和の礎に送られた。また、当日のミサ献金は、スーダン・ダルフール地方内戦難民の救済のためにカリタスジャパンを通じて送られた。

ミサ後、約七十名が大通公園まで、「憲法九条は世界の宝だ！地上から核兵器をなくそう！」と訴え、平和行進を行った。

# ドイツ・フライブルグ大聖堂少年合唱団

## 創立四十周年記念日本公演

今回の日本公演は、八月二十一日の東京公演を皮切りに、九月五日まで全国十二会場で開催

北海道は札幌と函館で五公演行い、約六十名のメンバーは、藤学園学生や函館少年少女合唱団との交流を行ったり、公演の合間を利用して旭山動物園やモエレ沼公園などの見学も行ったという。

ドイツのキリスト教文化と日本文化の出会いは、わたしたちにとっても、彼らにとっても恵み豊かなものとなったことでしょう。

# 「マザー・テレサ生誕百周年」

## ビデオ上映と写真展

今年の八月二十六日はマザー・テレサの生誕百周年にあたり、それを記念して道内でも函館や苫小牧など各地区で上映会が開催

今回は、小野幌教会での取り組みを紹介する。

小野幌教会では、八月二十七日（金）から二十九日（日）の三日間、午前十時から夕方四時まで、ビデオ連続上映と写真パネル展を実施。

ビデオは、・「マザー・テレサとその世界」・「マザー・テレサの遺言」・「母なることの由来」の三本を毎日繰り返して上映。

また、東京の女子パウロ修道会から十二枚組の写真パネルを借りてホールに展示し、インドのカルカッタで生涯貧しい人々に献身的に奉仕し、その愛の活動を世界中に広めたマザーの姿を偲んだ。

来場者は、三日間でのべ九十名ほどで、小野幌教会の信徒のほかに、虹の森幼稚園の親子、近隣の聖公会やプロテスタント教会の牧師や信者、更に区立児童会館の父兄や子ども達も訪れ、広く地域への福音宣教の働きの一助となった手応えを感じたと教会関係者は語っている。

また、会場では、主任司祭の呼びかけに応えて、高校生会も若い力でパンフレットの配布に協力し、光明社の書籍販売コーナーも大変盛況でした。

主任司祭の新海神父は、「親が子どもを虐待したり、殺しあったりする事件が頻発し、親子の絆と生命の尊さが軽視される今の時代こそマザー・テレサの愛と平和の精神をしっかりと受け継ぎ、人々に知らせ証ししてゆきたいと思います。」と語っていた。

# 苫小牧女性大会を終えて

毎年行われている「カトリック苫小牧地区女性大会」が八月二十八日、本年度の当番教会である カトリック苫小牧教会で開催された。

遠くは伊達・静内・室蘭・東室蘭・登別教会からの参加者七十七名に加え小林神父様・ソン神父様・ライヤ神父様が参加されました。

今回は講師に、函館の総合老人施設『旭ヶ岡の家』でチャプレンとして働いておられる山内実神父様をお招き致しました。

テーマは『キリスト共に生きぬくために』と題し、講話を二回そのつど、分かち合いを十グループに分けて行い、最後に四人の司祭によるミサに与り、無事終了致しました。

例年になく暑い夏の続く日々でしたが、準備委員を中心に大会開催への緊張感を持って、教会全体が協力し合い当日を迎えました。

受付前から、久しぶりに会う人との会話があちこちで響き、山内神父様の講話を聞き、信仰と生活が遊離していないか気付かされ、分かち合いで他教会の人とふれ合う時間をもち、参加者一人一人に実りある一日になったと思います。来年の四十六回女性大会は伊達教会が当番です。継続されていくことを祈りながら、たくさんの人との出会いをありがとうございましたと、神様に感謝いたしました。（実行委員　代表）

## 新刊とDVDの紹介

**▼クリスマス絵本①**
**晴佐久昌英神父が贈る福音全開のクリスマス**
**「あぶうばぶう」**
ドン・ボスコ社刊
定価1、050円（税込）

力強いメッセージと、とびっきりのイラスト。つらい時でも、心細い時でも、心配な時でも、絶対元気がわいてくる！

**▼クリスマス絵本②**
**クリスマスものがたり**
**「10ぴきのひつじ」**
ドン・ボスコ社刊
定価840円（税込）

「ほしのかがやくよるに」をひと回り小さくし、価格を求めやすくしたリニューアル版。リズミカルな文は読み聞かせにも最適です！

**▼小冊子「光の贈りものクリスマス」**
ドン・ボスコ社刊
定価158円（税込）

クリスマスにまつわる心温まる読み物、写真や名画、イラストが満載。クリスマスの本当の意味を深めたい方や、初めてクリスマスの教会を訪れる方に！

**▼カトリック新聞社編**
**「神父燦燦－カトリック司祭58人に聞く－」**
教友社刊
定価1、260円

カトリック新聞に掲載されたコラム「神父燦燦」を中心に単行本化。司祭の実像をインタビューの形で描き出したもので、司祭召命への理解にも役立つ一冊。

**▼短編アニメーションDVD「こちらたまご応答ねがいます」**
販売問合せ＝女子パウロ会
販売価格＝4、200円、ライブラリー価格＝1万円

信徒で映画監督の千葉茂樹さん（SIGNIS JAPAN会長）が企画・脚本・監修をした短編アニメーション「こちらたまご応答ねがいます」（ピクチャーズネットワーク製作）のDVD「こちらたまご応答ねがいます」は、第一回福永令三児童文学賞受賞の同名絵本をもとにした短編アニメーション。お母さんのお腹に宿った胎児（たまご）が中絶されそうになり、小学校六年生のおにいちゃん「卓」に「救助を求める」というストーリー。胎児との対話を通して生命尊重、女性の尊厳、妊娠の仕組みなどが平易に紹介されていて「良質の性教育教材」としても子供を含めた多くの人に観てもらいたい作品。

マザー・テレサの精神を受け継ぐ「生命尊重運動」メンバーのお母さんが、テレビ番組で援助交際している女子高校生が「妊娠したらどうするの」と聞かれて「そんなの簡単。中絶しちゃえばいい」と話すのを見て、憤慨し新聞の折込広告の裏にひと晩で書き上げたストーリーが基です。

映像時間は本編二十八分とレントゲン撮影による妊娠の経過を収めた特典映像「たまごが赤ちゃんになるまで」（十四分）の合わせて四十二分と、小さな子供でも飽きない時間内で収録されています。既に福島県や千葉県の「男女参画共生センター」でも上映されるなど普及活動が実施されています。

## 「第17回カトリック日韓学生交流会」参加者募集

**韓国の馬山教区で開催－韓国の学生とのふれあいの場へ**
**あなたも是非参加しませんか**

今回は「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17・21）をテーマに開催されます。ホームステイ、文化交流、祈りの会、分かち合いなど盛りだくさんの内容となっています。

◆**期間**＝2011年２月17日（木）～22日（火）
◆**場所**＝韓国　馬山教区
◆**費用**＝参加費１万５千円と旅費実費
◆**募集対象者**＝18～25歳の学生
◆**募集定員**＝20名（定員になり次第〆切となります）
◆**募集〆切**＝2010年11月30日（火）
◆**参考に次のアドレスからホームページをご覧下さい**
http://www.osaka-youth.com/
◆**問合せ・申込＝E-mail**で大阪教区の松村繁彦神父までお願いします。E-mail：hiko4345@yahoo.co.jp

## 菊地司教様への感謝ミサと集いの時間と会場変更のお知らせ

前号でお知らせした内容に変更があり、次の通りです。

日時　2010年11月23日（火・勤労感謝の日）　10：30

会場　カトリック北11条教会（札幌市東区北11条東２丁目）

## 2011年ワールドユースデー（WYD）マドリード大会に一緒に参加しよう

過去の大会に参加した青年たちからは、「ＷＹＤに参加して、素晴らしい体験ができた。」「日本の教会共同体では体験することが出来ない、カトリックのスケールの凄さを体験できた。」「日本の他教区の青年や、他の国の青年たちと交流がもててとてもよかったです。」「カトリックは世界共通なのだと改めて痛感させられ貴重な体験ができました。」などの感想が寄せられています。今回は、サンチャゴ巡礼のコースも組まれています。青年だからできる体験を是非この機会にしてみませんか。

◆ＷＹＤ開催日＝2011年８月16日～21日

◆対象＝高校生を除く18歳～35歳

◆問合せ先＝担当司祭の森田健児神父までお問合せください。（月寒教会　電話　011-851-2032）

◆教区Ｗｅｂページからも詳細がご覧になれます

http://www.csd.or.jp

## 訃報

※ 神様のみもとでの安息をお祈り下さい ※

◇殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▼Sr.M ベルナルディン　安井　匡子

初誓願後、藤女子短大と大学で食物栄養学を教授し、良い栄養士を育てるだけでなく、将来良い社会人、良い家庭人となって幸せな生活を送ることが出来るように、よく指導した。藤女子大学を退職した一九九八年から二〇〇七年まで、学校法人藤学園の理事長を務める。健康にあまり恵まれませんでしたが、人生の中で担ってきた自分の病気について、決して嘆くことなく、「私にとって病気は私を苦しめるだけのものではなく、私の内的生活を深め、豊かにするものでした。」と話していたそうです。

【略歴】

1933年10月1日　旭川市生まれ

1953年4月4日　札幌マリア院聖堂にて受洗

1958年1月29日　入会

1961年1月12日　初誓願

1966年9月23日　終生誓願

2010年9月8日　帰天

▼Sr.M ヴァルブルガ　小笠原　連子

札幌をはじめ岩見沢、留萌、一関旭町、東京、旭川、網走等の支部で主に調理の仕事を中心に修道院内の仕事に従事。求められる前に人の必要を敏感に感じ取り、適切・十分な配慮の出来るシスターで、喜ぶ人と共に喜び、心傷ついた人を母の心で労わり、優しい笑顔には、人の心を温め癒す力があったと言います。

【略歴】

1932年10月7日　江差町生まれ

1949年4月16日　小樽の富岡教会にて受洗

1955年11月25日　入会

1958年8月12日　初請願

1963年8月12日　終生請願

2007年11月23日　金祝

2010年9月16日　帰天

## 教区の風

※ このコーナーは皆さんから寄せられた寄稿文を掲載するコーナーです。皆さんの寄稿をお待ちしています ※

二〇一〇年度難民移住移動者委員会の「全国研修会in新庄」が、「待ち続けた夢がかなう時 ― 南国から北国へ　農村で生きるフィリピンの女性たち」をテーマに、十月二十六日（火）から十月二十八日（木）まで新潟教区で開催された。

新庄周辺は豪雪地帯として有名であるが、そんな東北の地域に、フィリピンから花嫁として嫁いで二十年以上の月日が経過したという。約二〇〇人の人たちが、農村花嫁として、夫、子どもたち、舅姑とともに暮らしていると聞く。雪の降らない南国から雪深い北国に来て、強く、たくましく、そして朗らかに生きている彼女たちの「力と優しさ」の源は一体何なのか。

私たちにはかけている何かがそこにあるはずである。ない頭を絞って考えてみた。「信仰の強さ」「結婚ということの考え方」「家族の絆」「働くという意味」・・・

何故か今の日本に欠けている内容がずらずらと頭に浮かんでくる。経済的には成長をとげた日本であるが、大切な心の成長がついていっていないような気がする。彼女らを見習って心を大切にしたいものである。

## 編集後記

今年も夏から秋にかけて、札幌教区内では様々な行事が執り行われました。十一月二十三日には、タルチシオ菊地功司教の教区管理者就任一周年の感謝ミサと集いがあります。会場と時間が北十一条教会で十時三十分から行われることに変更となりました。新潟司教と兼任のハードスケジュールをこの一年こなして頂いたことに、ともに心から感謝の気持ちを奉げましょう。　（編集子）